

専門性の高い学部における 教養教育の実践例

— 尚美学園大学聞き取り調査報告 —

田辺 三千広^{*1}, 森川 孝典^{*1}, 中島 英司^{*1}

^{*1} リハビリテーション学部（教養教育科目担当）

研究プロジェクト名

医療系学部における教養教育のあり方

要旨

「専門性の高い学部における教養教育のあり方」というテーマを掲げ、尚美学園大学（埼玉県川越市）で聞き取り調査を行った。同大学には医療系学部は設けられていないが、音楽情報学部という専門性の高い学部をもっていることから調査の対象とした。本稿はこの聞き取り調査の報告である。

我々の主な関心事は、専門性の高い学部において、一般教養科目がどのような位置づけをされているのかという点であった。同大学では、いわゆる「一般教養科目」というものを設けず、それにあたるすべての科目を「総合科目」として、「概論」（前期）と「特論」（後期）を組み合わせ、2学期にわたって開講している。すなわち、学生の専門科目とは別に、担当教員の専門性を生かした授業が展開されている。この形態の利点としては、一つには、学生に社会的問題に対するより広い視野を涵養できるという点、もう一つには、担当教員の教育への参加意識を向上させるという点が挙げられる。

語学教育についても聞き取りをした。すなわち、「英語」教育の重要性は当然であるが、それ以外の外国語の取り扱いについてたずねた。それに対する回答は、「英語」を苦手とする学生にはあえてそれを強制せず、多くの他の外国語の中から一つを選ばせるというものであった。この点については、大いに共感できたが、本学リハビリテーション学部の学生には安易に適用できないと思われる。

Key Words：専門性の高い学部，教養教育，尚美学園大学，実践例

【はじめに】

「医療系学部における教養教育のあり方」というテーマのもと共同研究を始め、2年が経過した。初年度には、研究紀要『人文研究論叢』にその研究成果の一端を発表した。その内容は、共同研究者それぞれが、実際に本学リハビリテーション学部でどのような教養教育を行っているか明らかにするものであった⁽¹⁾。また、具体的なカリキュラムの改善を図るため、いくつかの大学のカリキュラムの検討も進めた。笠原正男前学部長や市崎謙作元鈴鹿医療科学大学教授をお招きし、笠原氏には慶應義塾大学医学部や藤田保健衛生大学における教養教育を、市崎氏には日本赤十字豊田看護大学や鈴鹿医療科学大学の教養教育を紹介していただき、ご意見を聴取した。

2年目の平成19年度には、同じテーマの共同研究を研究所研究プロジェクトの一環として継続した。私たちは前年度にひきつづき、医療系やスポーツ・芸術系など専門性の高い学部における教養教育のあり方を調査・検討することとし、芸術情報学部を擁する尚美学園大学（埼玉県川越市）に出向いた。尚美学園大学は音楽系の専門学校を母体として2000年に開学。芸術情報学部と総合政策学部の二学部を擁する。そして総合政策学部の教員は芸術情報学部の教養教育も担当されている。我々は、総合政策学部ライフマネジメント学科長で教務部長も兼任されておられる坂本邦彦教授と、同学部で語学を担当されている伊達雅彦准教授から直接お話を伺うことができた。

I

尚美学園大学は、総合政策学部には総合政策学科とライフマネジメント学科を、そして、芸術情報学部には情報表現学科と音楽表現学科を併せもつ大学である。さらに、それぞれの学部に大学院が設置されている。同大学の考え方の一つに、一学部には複数の学科を設置する必要があるという考えがある。そこには、いかなる学問分野であろうと、その専門分野を深めていくだけでなく、広い視野に立って研究・教育を進めていくべきであるという理念がみて取れる。その意味で教養教育（語学教育を含む）についての聞き取り調査には期待がもてた。

尚美学園大学での聞き取り調査を行うに際し、我々は予め質問事項を送っておいた。大項目として3点、それらに関連した小項目を11点、語学教育に関して7点である。それらの質問について当日、坂本、伊達両氏が対応してくれた。我々の主目的である「専門性の高い学部における教養教育のあり方」の調査という点では、芸術情報学部の教養教育担当責任者からの聞き取りが必要であると考えたが、それは誤解であった。同大学では、一般教養科目に当たる両学部共通の「総合科目」は、総合政策学部の教員が担当しているからである。それ故、当事者であるお二人の先生からは、後述のように、貴重なお話を聞くことができた。また、予め質問事項を送付していたことから、両先生は資料を準備され、そ

れらを提示しつつ丁寧に対応してくださった。

我々の大項目の質問事項は以下の 3 点であった。

- (1) 教養教育と専門教育のかかわりに関する教員の意識はどのようなものか。長い時間の経過のなかでどのような変化が見られるのか。あるいは、これまで首尾一貫したものであったのか。
- (2) 専門性の高い学部での教養教育に対する考え方はどのようなものか。具体的には、カリキュラムの中でどのように具現化しているのか。さらに、将来、変化していく傾向にあるのか。
- (3) 専門教育にのみ関心を示す学生や親に対する対応はどうか。教養教育の重要性を認識させる必要はあるのかないのか。

これらの質問項目にたいする回答と語学教育についての説明は、以下の通りであった。

「一般教養科目」に相当するのは両学部「共通科目」内の「総合科目」であり、総合政策学部所属の教員全員がそれを担当している。したがって、尚美学園では「一般教養」という概念は存在しない。総合政策学部の教員にあっては、自分が「一般教養担当教員」であるという意識はない。それぞれの教員がいずれの学部においても自分の専門分野の概論と特論を担当しているのである。「専門」と「教養」という対概念を意識しないで教育に当たっているというお話は新鮮な驚きをもって受けとめられた。ただ、この説明に対し、「総合科目」の実施・運営について両学部間で定期的な協議が必要になってくるのではないかと思われ、その点を質問した。それに対して、坂本・伊達両氏は、両学部の定期的な会議は行われていない、行ったとしても効果がないだろうと回答された。すなわち、両学部の「総合科目」については、総合政策学部が責任をもって実施しているということである。

次いで、上述の質問事項への回答として、カリキュラム体系の説明がなされたが、ここでは、両学部「共通科目」にのみ言及しておきたい。「共通科目」は「総合科目」(1～4 年配当、本学の「教養教育科目」に相当する)、「情報科目」(1 年は必修、2～4 年は選択)、「外国語科目」(1・2 年はそれぞれ 1 科目必修、それ以外に 1～4 年に選択科目を配置)、「日本語科目」(1・2 年の留学生はそれぞれ 1 科目必修、それ以外に 1～4 年に選択科目を配置)、そして、「ウェルネス科目」(1～4 年に配当) より成っている。そのうちの「総合科目」は、「メディア・コミュニケーション」、「社会科学」、「人文科学」に区分されている。「社会科学」に属する科目のうち「現代の政治」、「法学 B」、「現代の経済」の三科目は必修科目に指定されている。芸術分野を専攻する学生にとっても、現代社会の中で生きるという意識をもたせることが重要だと考えての措置である。

「情報科目」には「コンピュータリテラシー演習」他が設けられている。

「外国語科目」には「英語」、「ドイツ語」、「フランス語」、「スペイン語」、「イタリア語」、「中国語」、「韓国語」、「ラテン語」がすべて選択科目として設けられている。星城大学と学生数の点で大差がないにもかかわらず、外国語の種類の多さがきわだっている。また、

次節で言及するが、「英語」を必修科目に指定していないところも工夫の跡がみられる。

「日本語科目」は、留学生用に設けられたもので、大学在籍の4年間を通して履修できることが特徴であろう。「ウェルネス科目」は、スポーツ関連の科目である。

II

これまで尚美学園大学の「共通科目」を中心に紹介してきた。その大きな特徴の一つは、総合政策学部全教員が、芸術情報学部を含め大学全体の「教養教育」に当たるという点である。そして、すべての「共通科目」が「概論」と「特論」をセットにして2学期にわたって開設されている。すなわち、総合政策学部のそれぞれの教員が自分の専門分野の授業を1年間にわたって担当しているのである。

この方法にはいくつかの利点が考えられる。一つには、専門分野を専攻する学生にとって社会性を身につけ、視野を広げ、自分の専門分野にこれまでの視点に加え、それとは異なる視点を持ちこみ、新しいものを創造する「力」を身につけることに役立つという点である。しかし、これには解決しなければならない課題がある。すなわち、専門性を身につけることを目的に入学してきた学生に、社会性を身につけ視野を広げることの重要性をどれほど理解してもらえるかである。これを認識させるのは容易ではない。

もう一つの利点は、教員の意識にある。尚美学園大学では総合政策学部全教員が、両学部において、自分の専門を生かした授業を1年かけてじっくり担当することにより、両学部の学生を全員で教育するという連帯感を生みだし、教育効果をあげている。この方式を取り入れるならば、本学リハビリテーション学部でも「教養科目」を担当する教員のモチベーションのさらなる向上が期待できる。「概論」と「特論」をセットにして一つの科目を任されることにより、担当教員の専門分野についてもある程度言及が可能になり、自らの学問を学生に語る機会が得られることになる。当然それは担当教員の教育に対する熱意を喚起することにつながっていくであろう。もちろん、その方式の導入のためには本学リハビリテーション学部のカリキュラムを大幅に変更しなければならない。その提案の具体化と合意形成が、今後の検討課題になる。

次に、「外国語教育」について。星城大学のリハビリテーション学部と尚美学園大学の芸術情報学部では、それぞれ事情が異なるため、安易に比較はできないが、一般的な問題に限って考えてみたい。「外国語教育」については、伊達先生が我々の多くの質問に懇切丁寧に答えてくださった。ここでは紙面の関係で詳しく紹介できないのが残念である。一点だけ紹介したい。

開学当初、尚美学園大学では「英語」を必修科目としていた。英語担当教員は、独自のテキストや視聴覚教材（CD）を作成し、熱心に語学教育に取り組んだ。しかし、実際に授業を始めてみると、毎年、予想をはるかに上回る「再履修者」を出してしまった。英語に

興味・関心をもてない学生も現れた。しだいに「英語必修」という考えを固持する教員は少なくなっていく。その後、先に述べたように「英語」以外に多くの「外国語」を導入し、原則として「英語」を必修科目から外し、学生の興味を重視して選択制に変えた。現在では、芸術情報学部・音楽表現学科の音楽コースの学生は「イタリア語」を必修とし（これは、おそらく、開学当初からのことと思われる）、また、同学部・情報表現学科の学生は「英語」が必修と決まっているが、その他の学生は多数設けられている「外国語」のうちから自由に選択することができる。

「再履修者」が多数発生したことにより「英語」を必修から外すという考えは、本学のリハビリテーション学部では今のところあてはまらないので、詳細な検討は差し控える。ただ、尚美学園大学の柔軟な対応を高く評価したいということだけを表明しておく。

本学リハビリテーション学部の学生にとって、専門性を身につけるうえで「英語」は必要不可欠なものであることから、現在の「英語必修」という形を維持することが望ましい。しかし、時間と学力に余裕のある学生に対して、「英語」以外のさまざまな外国語に触れる機会を奪うべきではないと考える。第二外国語の学習は、教養を広げるだけでなく、「英語」の学習そのものにも良い影響を与えると確信するからである。

III

最後に、総合政策学部ライフマネジメント学科の試み ― 自分をデザインし、社会でのマネジメント能力を引き出す教育、に触れておきたい。

総合政策学部は 2000 年の開学当初は総合政策学科 1 学科であった。07 年に文化コースとスポーツコースをもつライフマネジメント学科を増設し、今ひとつの学部である芸術情報学部と同じく 2 学科をもつ学部となった。総合政策学部の 2 学科の定員は総合政策学科 210 名に対しライフマネジメント学科は 110 名である。ライフマネジメント学科長の坂本氏とのインタビューと尚美学園大学の「08 年入学案内」によれば、この学科の講義の軸はパフォーマンス演習とビジュアル演習である。パフォーマンス演習はダンスや演劇など、また、ビジュアル演習はデッサンや彫刻などのことであるが、それら「体験系の演習」（「大学案内」）を中心に据えた理由は、学生に自己をみつめ直す機会をもって欲しいとの考えからである。

この発案は「五感を使うことは、自分発見に通じ、ひいては文化の創造につながる」との考え方に基づいている。むろん、この構想も問題がないわけではない。それは「彫刻に用いる大谷石や油絵の絵の具が高価で学生の自己負担が大きい」ことだ。この点は見直しが必要だと考えられている。ともあれ、以上のようにライフマネジメント学科の授業は 2 つの系統の演習を軸にしつつ、さらに法律、経営、生涯学習、文化政策、芸術の各分野を学んでいく。「マネジメントコースだから社会科学も必要」という学科の計らいである。な

尚美学園大学総合政策学部の卒業要件		
共通科目	総合科目（メディア 19 科目 38 単位，社会科学 18 科目 36 単位，人文科学 30 科目 60 単位）	22 単位以上
	情報科目（詳細は省略）	8 単位以上
	外国語科目（詳細は省略）	8 単位以上
	計 38 単位以上	
学部間選択科目		12 単位以内
専門科目		82 単位以上
卒業要件		132 単位以上

るほど尚美学園大学では、開講されている教養教育科目（前述のように同大学では「総合科目」と名づけている）が実に多く、なおかつ、入門編と特論が用意されていて、興味次第でより深く勉強でき

る体制ができています。専門科目のみならず教養系の科目をも重視していることは、多くの総合科目が開講されている点、また卒業要件の単位数で総合科目の占める割合が、星城大学と比べ多い点に表れているであろう。星城大学リハビリテーション学部では、情報、外国語を含め教養科目は 20 単位にすぎない。尚美学園大学については上の表を参照されたい。

ライフマネジメント学科ではこのような教育を通じて、学生たちがアートやスポーツの世界で力を発揮する術を身につけることができると考えている。

ところで、以上のような「仕掛けのカリキュラム」（インタビュー）をもった、スポーツと文化を取り合わせたライフマネジメント学科は、定員を確保して順調に滑り出したのだが、程なく、どちらかというスポーツコースの人气が先行し、文化コースがいまひとつ人气がないという問題を抱えることになった。その原因は、受験生にとってスポーツは分かりやすいが文化は分かりにくい、ということにある。それゆえ、学生募集に際しては文化コースで学ぶことの意味をどのように高校生にアピールするか工夫が必要である。

この点を尚美学園大学がどうクリアーするのか、文化や教養という同じ問題を扱う我々としては大いに注目したいところである。

謝辞

最後になったが、以上のように我々の研究が進展するきっかけを与えてくださった坂本、伊藤両氏に深謝の意を表したい。また、尚美学園大学・総合政策学部教授、加藤順一先生には大変お世話になった。今回の聞き取り調査に関しては細部にわたるまでコーディネートしてくださった。この場を借りて厚く御礼申し上げる。

注 1) 中島英司，田辺三千広，森川 孝典，加藤順一．医療系学部における教養教育の在り方．

「人文研究論叢」第 4 号．pp. 121－138．名古屋，星城大学，2008.